2022年5月1日 川越教会

丸山　勉

私は捨てない

［使徒言行録18章1～11節]

その後、パウロはアテネを去ってコリントへ行った。ここで、ポントス州出身のアキラというユダヤ人とその妻プリスキラに出会った。クラウディウス帝が全ユダヤ人をローマから退去させるようにと命令したので、最近イタリアから来たのである。パウロはこの二人を訪ね、職業が同じであったので、彼らの家に住み込んで、一緒に仕事をした。その職業はテント造りであった。パウロは安息日ごとに会堂で論じ、ユダヤ人やギリシア人の説得に努めていた。シラスとテモテがマケドニア州からやって来ると、パウロは御言葉を語ることに専念し、ユダヤ人に対してメシアはイエスであると力強く証しした。しかし、彼らが反抗し、口汚くののしったので、パウロは服の塵を振り払って言った。「あなたたちの血は、あなたたちの頭に降りかかれ。わたしには責任がない。今後、わたしは異邦人の方へ行く。」パウロはそこを去り、神をあがめるティティオ・ユストという人の家に移った。彼の家は会堂の隣にあった。会堂長のクリスポは、一家をあげて主を信じるようになった。また、コリントの多くの人々も、パウロの言葉を聞いて信じ、洗礼を受けた。ある夜のこと、主は幻の中でパウロにこう言われた。「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加える者はない。この町には、わたしの民が大勢いるからだ。」 パウロは一年六か月の間ここにとどまって、人々に神の言葉を教えた。

[１]　画期的な歴史書

今日から来月の最初の日曜日（聖霊降臨日）まで「使徒言行録」をご一緒に見て行きたいと思います。紀元1世紀の、生まれたばかりの教会の記録です。言ってみれば大昔の歴史を記したものです。でも、よくこのように残してくれたなあ、と思います。年表ではなく、だれがどこでどのような言葉を語ったか。それによってどのような反応があったか。…と、かなり詳細にその出来事を記してくれています。それ自体古代文書としては画期的なことだと思います。しかしそれは、違う言い方をすれば、このことは絶対に書き残しておかなければいけない！という当時の信仰共同体の思いが強くあった、ということなのだと思います。

今日の箇所は18章ですが、あの有名なパウロの手紙「コリントの信徒への手紙」（一と二）が宛てられたコリントの教会の誕生と繋がっています。コリントはユダヤから見れば異邦の地です。11節で「パウロは一年六か月の間ここにとどまって、人々に神の言葉を教えた」とありますが、「ここ」というのがコリントです。一年六カ月というのは今の私たちの感覚からはあまり長くないような気がしますが、恐らく毎日彼らは顔を合わせ、祈りを捧げていたでしょうから濃密な一年半だったと思います。あのコリントの手紙の中には、あの主の晩餐の制定の言葉（11章）もあります。「もし愛がなければ無に等しい」で知られる「愛の章」と呼ばれる13章も、また、キリストの復活は最後の敵である死を滅ぼした出来事で、終りの日の希望を高らかに語る15章など、宝のような言葉をパウロは残してくれたのですが、それは、この教会との幸いな出会いが生み出したものなのですね。

［２］ 網目のように進む伝道

　そもそも「伝道」って何なのでしょうか？もちろんそれはイエスこそ主である、イエスこそ真の神である、ということを宣べ伝えることですけれども、一般的に誤って捉えられがちな、「勢力拡大」のようなものではないですよね。覇権主義とくっついていたような宣教・伝道の時代もあったと思いますが、しかし当り前ですが、「信仰」というのは自由な内面の問題ですから、押し付けられるのであればそれは「信仰」ではないと思います。パウロも「ローマの信徒への手紙」の10章で、「人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われる」と語りましたが、「信じる」とはとても個人的・内面的なことであるということです。神様は、私たちの頭ではなく、心に働きかけて下さるのですね。ですから、「伝道」というのは何かテクニックのようなものではありませんね。逆に、これはもう今日の結論めいたことになりますが、伝道は「テクニック」でもそれに依り頼むのでもなく、神様のお働きを深く信じて祈って行く、ということだと思います。

　今日の箇所で、パウロにとって一番励まされたのは、人の言葉ではありませんでした。9節・10節で、主が或る夜このように語られたというのですね。「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加える者はない。この町には、わたしの民が大勢いるからだ。」 ―「恐れるな」と。パウロは何かを恐れていたのですね。それは何だったのでしょう。今日の18章前半を見ると、素晴らしい助け手が何人も登場してきます。まずアキラとプリスキラというユダヤ人の夫婦です。彼らはローマにいたのですが、皇帝による迫害が起こり、コリントに来ていました。しかもパウロと同じ「天幕作り」を生業としており、パウロの働きをかなり支えたのですね。さらに5節には仲間のテモテとシラスがマケドニア地方から献金を集めそれを携えてコリントに到着しました。それでパウロは「御言葉を語ることに専念」することができるようになりました。「伝道」というのは、一人で宣べ伝えるということもあるでしょうけれども、こういう色々な人の働きがアンサンブル、正に網目のようになって、「人間を漁（すなど）る」わざとなって神様がお用い下さるということが殆どだと思います。これこそ「教会的」だと思います。個人や、目立つ人だけの業ではなく、主にある交わりがそこに起こっていること自体が伝道だと言えると思います。

［３］ キリストの最終的統治を信じて

しかし、ここで聖書（著者ルカ）は大事なことを書き残してくれていると思います。皆さんどのように思われるか、私はこれはパウロの失敗だと思うのですが、ユダヤ人に伝道した時、パウロは口汚くののしられたということから、激しい言葉をユダヤ人に投げつけています。5節後半―「ユダヤ人に対してメシアはイエスであると力強く証しした。しかし、彼らが反抗し、口汚くののしったので、パウロは服の塵を振り払って言った。『あなたたちの血は、あなたたちの頭に降りかかれ。わたしには責任がない。今後、わたしは異邦人の方へ行く。』」…まぁ、このことによって福音が異邦人に及ぶようになったという出発点にもなったのですが、パウロのこの態度は私はどうなんだろう？と思ってしまいます。私はあのポンテオ・ピラトのことを思い出してしまいます。マタイ福音書27章です。

27章23節以下。―「ピラトは、「いったいどんな悪事を働いたというのか」と言ったが、群衆はますます激しく、「十字架につけろ」と叫び続けた。ピラトは、それ以上言っても無駄なばかりか、かえって騒動が起こりそうなのを見て、水を持って来させ、群衆の前で手を洗って言った。「この人の血について、わたしには責任がない。お前たちの問題だ。」 ―これは「関係」を切ってしまう言葉ではないでしょうか。「知ったことか。君たちの責任だ」と。パウロもそのようなことを同族のユダヤ人に対して吐いてしまった訳です。よくこういう言葉を記録してくれたなと思います。パウロは感情的になり、キレてしまっている。この後を見ると表面上は伝道が進んでいるのです。パウロは神様を崇める外国人のティティオ・ユストという人の家に移り（つまり会堂を出て）そこで宣教したということですが、その家は会堂と隣り合わせにあり、会堂の司のクリスポとその家族が信仰に導かれ、コリントの人々も多くの者が主を信じ、バプテスマ・洗礼を受けたとあります。異邦人への伝道は進んでいます。しかし彼の心の中には、あの切ってしまったユダヤ人たちのことが頭から離れず苦しんだに違いないと思います。例えばパウロは、ロマ書９章で、私は同胞の救いのためならばこの身が神様に見捨てられてもよいとさえ語っています。そんな彼はきっと夜になると、疼く心があったのだと思います。同族のユダヤ人に対しあんなことを言ってしまった。恥ずかしい。失敗したと。

私は、勿論パウロのような人物では到底ありませんけれども、自分の言ったこと、やってしまったことに心が責められて「自分は牧師を続けられるのだろうか」と沈んでしまうことがあるのです。自分の不甲斐なさに苦しむことが度々あります。伝道者は必ずそういうことがあるのだと思います。パウロの恐れの内容は分かりませんが、神様はそのパウロの恐れを良く知っていたのですね。それで、人ではない、主ご自身がパウロに直接語って下さいました。「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。…この町には、わたしの民が大勢いる」 と。こんなに大きな励ましはないでしょう。そして彼は悔い改めたに違いありません。私は同族の者に対して酷いことを言って切ってしまった。しかし、神様は切り捨ててはいない。そもそも私自身が神様の敵であったではないか！その私を主は赦し、イエス・キリストの救いを宣べ伝える器として下さったではないか。捨てられてしかるべき私が捨てられず、むしろ用いられている！その私のためにこそ、イエス・キリストは死んで下さり、甦って下さったのではなかったか！と。

「伝道」とは、神様ご自身のお働きであり、聖霊のお働きです。私たちはその道具に過ぎないし、また道具・器として頂けるということがどれだけ貴いことかと思います。私たちもまた同じように「神の民」とされているのですね。

W・ウィルモンという人が書いた『牧師（その神学と実践）』という素晴らしい本があるのですが、「牧師の職務についての失敗」という項の中にこんなことが書かれてあって励まされたのです。―「十字架に挙げられた方は、またイースターにおいて復活された方でもある。失敗についてのキリスト教的な考え方も、すべてこの復活という背景の中で思い巡らされる。どんなことであろうと、たとえ牧師の愚かな行為であろうと、神の支配の最終的勝利を歪めることは出来ない。私たち牧師が自らの失敗に大胆に向かい合うことが出来るのは、この世がまだ知らない世界について私たちが少しは知っており、この世が小羊（キリスト）のものであること、そして彼が統治するであろうことを信じているからだ。」

教会は、この彼の最終的統治（それは限りない愛による統治です）を信じて、共に旅をする群れだと思います。大胆に信じ、恐れずにキリストの愛の中に生きてゆきましょう。お祈り致します。

神様、いつも十字架と復活の主のもとに立ち帰ることが出来ますように。奢る心をすぐに持ってしまい、人を傷つけてしまう者です。お許しください。あなたは全ての者を愛して下さっています。その愛に押し出して下さい。あなたの道具とされる幸いに生かして下さい。主の御名によって祈ります。アーメン。